

カフカとミレナの関わり

—ウィーンの森とグミュントで起こったこと—

佐々木 博 康

Kafkas Beziehung zu Milena

— Was im Wienerwald und in Gmünd geschah —

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第36巻第2号

2014年10月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 36, No. 2, October 2014

OITA, JAPAN

カフカとミレナの関わり

—ウィーンの森とグミュントで起こったこと—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿は、2013年に出版されたハルトムート・ビンダーの『カフカのウィーン』に依拠しつつ、フランツ・カフカとミレナ・イエセンズカー＝ポラックとの9ヶ月弱にわたる恋愛関係を概観し、破綻に至った原因を追究するものである。カフカは1920年4月に療養の地メラーンからミレナに手紙を書いた。手紙のやり取りは急速に恋愛関係へと発展した。二人はウィーンで幸福な四日間を過ごす。一ヶ月半後のグミュントでの逢瀬では二人の間にすさまじい風が吹き始める。カフカのミレナとの関係において大きな障害となったのは、性行為に対するカフカの強い不安である。ミレナはこの不安を事前に理解し、ウィーンの森での出会いにおいては適切に対処した。しかしミレナは結局、性行為を抜きにした関係をあくまで求めるカフカに従うことはできなかった。

【キーワード】 恋愛 不安 性行為 夢の恐怖

はじめに

本稿は、フランツ・カフカの後期の作品を解釈する上で重要な鍵となる、カフカとミレナ・イエセンズカー＝ポラックとの恋愛関係を考察するものである。

カフカの文学的成果はゆるぎないものとなっているが、伝記的事実についてはまだはっきりしていない部分も多い。実証的研究において定評のあるハルトムート・ビンダーが2013年に出版した『カフカのウィーン』¹⁾を見ると、ミレナとの恋愛に関する個々の事実が、これまでに出版されたカフカ年譜、エルンスト・パーヴェルやペーター＝アンドレ・アルトの伝記²⁾などと大きく食い違っている個所も多い。伝記的事実の誤解が、カフカのミレナとの恋愛関係の捉え方の違いとなり、ひいては作品解釈の相違となることも十分考えられる。

ここではビンダーの最新の研究に依拠しつつ、カフカとミレナの関わりを捉え直す。最初にカフカとミレナの恋愛の始まりから終わりまでを概観し、次いで二人の関係が破綻に終わった原因を追究する。

平成26年5月31日受理

*ささき・ひろやす 大分大学教育福祉科学部情報国際教育講座(ドイツ文学)

I 関係の概略

1. 文通の開始からウィーンでの逢瀬まで

結核療養のために南チロルのメラーンに来て数日後の1920年4月8日、カフカはウィーンに住むミレナに手紙を出した。当時23歳のチェコ人女性ミレナは、銀行員であり文士でもあったエルンスト・ボラックの妻だったが、夫から生活費を渡してもらえなかったため、故郷プラハの新聞に記事を書いたり、翻訳をすることで生活の資を得ていた。2月頃に帰郷した折、カフカ・アルコでカフカと会い、彼の物語をチェコ語に翻訳する許可を求めた³⁾。

二人の手紙のやりとりは頻繁になり、急速に恋愛関係へと発展した。ビンダーによれば、遅くとも5月の終わりにはミレナはカフカに好意をほのめかしたようである⁴⁾。そしてカフカに、療養を終えてメラーンからプラハに帰るさいにウィーンを経由するつもりはないかと尋ねてきた。ミレナの誘いにカフカは激しく動揺する。ウィーンに行けない理由を縷々述べるが、彼女を納得させることはできない。ミレナからの非難もあって、結局6月末にウィーンで会うことが決まるのであるが、この一ヶ月間、カフカは行く行かないの間で揺れ続け、呻吟し続けるのである。なお、親しい間柄で使われる親称の二人称Duをカフカがミレナに対して使うのは、6月12日の手紙が最初である。

2. ウィーンの四日間

6月28日、カフカはメラーンを発った⁵⁾。29日朝にウィーン南駅に到着し、ホテル・リヴァに部屋を取る。それからミレナに、30日朝ホテルの前で待っていると知らせる局留めの郵便を送ったが、ビンダーによると、29日の夕方にはもうミレナに会った可能性が高いという⁶⁾。その晩は二人で映画を見に行ったとのことである。翌30日は、ミレナがカフカに自分の生活圏にあるさまざまな場所を見せたと推測されている。レルヒェンフェルダー通りの三階にある自分の住居に連れて行ったり、またしばしば訪れるレストランなどを見せたようである。7月1日には、二人で一日中ウィーンの森を歩いた⁷⁾。2日と3日にはウィーンを見物してまわり、フォルクス庭園、プラーター公園などを訪問したようである。7月3日はカフカの37歳の誕生日だったので、二人でどこかのレストランで祝ったかもしれない。そして7月4日の日曜日の朝、カフカはミレナに見送られてプラハ行きの列車に乗った。カフカにとっても、またミレナにとっても幸福な四日間だった。

3. ウィーンから戻って

7月4日にプラハに戻ったカフカは、その日のうちに、結婚が駄目になったにもかかわらずまだ婚約中だったユーリエ・ヴォホリゼクと会い、別れ話を切り出している。翌5日には友人のマックス・ブロートと話した。ブロートは、当時の印象を次のように述べている。「彼が1920年の前半に、療養を終えてメラーンからプラハに戻ってきたとき、私にはそれが彼だとはとても思えないほどだった。ふだんはあんなにも物静かなのに、とても幸せそうに、そしてすさまじい勢いで、ミレナと過ごしたウィーンでの日々のことを語ったのだ。」⁸⁾ カフカは、ミレナが近いうちに夫のもとを離れプラハにやってくると考えていたのである。

しかし事態はカフカの思っていたようには進まなかった。7月から8月半ばにかけて、カフ

カはミレナに、プラハに来るよう誘う言葉を何度も書き送っている。たとえば7月15日の手紙には、「君がまもなくパスポートを手に入れると思うと、とてもほっとする」(Mi 118)、「僕たちが一緒にいたら人生はどんなに軽やかになることだろう」(Mi 119)という文章が見られる。これまでの優柔不断なカフカには見られないような熱心さである。しかしミレナの態度が煮え切らない。そしてそのことがカフカに不安を喚び起こすことになる。7月17日には、「僕にはわかっている。君は苦しみ身をよじるが、離れられない(……) けっして離れられないだろう」(Mi 122)と書き、21日には、「君がウィーンでの僕にすっかり納得していたら(……)、何があろうと君はもうウィーンにはいないだろう」(Mi 134)と書く。8月8日から9日にかけての手紙では、夫を愛しているから離れられないとか、夫が自分を心から求めているので別れられないというのならわかるが、自分がいなくて夫が生活していけないので離れられないという意見には納得できないとカフカは批判している。つまりミレナは、そのようにカフカのところに行けない理由づけをしていたのである。

4. グミュントの一日

カフカは8月1日、プラハとウィーンの間にある国境の町グミュントで会うことをミレナに提案する。8月8日はミレナ都合で駄目になったが、次の日曜日の8月15日には二人の再会が実現した。ビンダーの推定によれば、カフカは前日の夕方か晩にプラハを発ち、グミュントで一人で一晩を過ごしたか、各駅停車で15日早朝にグミュントに到着したかのいずれかであり、後者の可能性が高いとのことである。ミレナは15日の10時半頃にグミュントに到着し、同日の21時50分発の列車でグミュントを離れたので、二人が一緒にいたのは都合11時間ほどである⁹⁾。

5. グミュント以降

グミュントでは、ウィーンで会ったときとは異なり、カフカが期待していた親密さは失われていた。8月19日から23日にかけて書いた手紙でカフカは、「あの日、僕たちは一緒に話をして、お互いに耳を傾けていた。しばしば、そして長い間。まるで見知らぬ者同士のように」(Mi 224)と述べている。カフカが気づかないうちにミレナは遠ざかってしまっていたのである。グミュントから戻ってまだ間がない8月19日から20日にかけての夜、カフカは長らく中断していた執筆活動を再開するが、これはミレナとの関係の終わりをはっきり感じとったからだろう。現実生活から「書くこと」へと撤退したのである。

9月にはミレナに、「もうずっと前から僕たちは、お互いにもう手紙を書くべきではないという点では一致している」(Mi 264)、「僕たちは決して一緒に暮らすことはないだろうし、またできないだろう」(Mi 279)と書いている。プロートは10月18日の日記に、「カフカはしばらく前、また愛を断念した」¹⁰⁾と記した。1921年1月初め、カフカはミレナに、「もう手紙を書かないように、そして僕たちが今後顔を合わせたりすることがないようにしよう」¹¹⁾と頼んでいる。こうしてカフカのミレナとの恋愛は決定的に終わったのである。

6. その後の関わり

二人はその後も散発的ではあるが、手紙をやりとりしているし、また会ってもいる。1921年10月にはカフカはミレナに自分のそれまでの日記すべてと、未完に終わった『失踪者』の

原稿を委ねている。11月には、プラハで静養しているカフカをミレナが4度にわたって訪ねているし、1922年にも4月27日と5月8日にミレナの訪問があった。ただ、これは病気見舞いという性質のものである。1923年3月以降にカフカからミレナに断続的に出された手紙では、もはや親称のDuは使われず、敬称のSieに戻っており、呼びかけも気安い「ミレナ」ではなく、距離を置いた「ミレナ様 (Frau Milena)」となっている。

これまでカフカがミレナと会ったのは1922年の5月8日が最後だと見なされてきた¹²⁾。しかしビンダーによれば、1938年にミレナは恋人ヴィリー・シュラム¹³⁾に宛てて、「私はカフカがウィーンで死の床に横たわっていたとき、彼の隣に座っていました。そして彼が死ぬまでそうしていました¹⁴⁾」と書いているし、一緒に訪問したとされる彼女の当時の恋人フランツ・クサーヴァー・シャフゴツチュ伯爵もまた訪問を証言する文章を残しているとのことである。ミレナが、1924年、シャフゴツチュ伯爵とともに、キアリングで死の床に横たわるカフカを見舞ったことは確かなようである¹⁵⁾。

II 関係のまとめ

1. カフカの「不安」とは何か

カフカとミレナの関係を見るとき、「不安」が二人の間に大きな影を投げかけている。カフカのいう「不安」とは何だったのかを最初に見ておく。

1920年5月末にミレナからウィーンに来るようにとの誘いを受けたカフカは、ほとんどパニックに近いような動揺を示している。最初の反応(5月31日の手紙)は次のようなものである。

私は行くつもりはありません(ミレナ、助けて下さい! 私が語る以上のことをわかってください!) 私は行くつもりはありません(どもっているんじゃない) ウィーンへは行きません。なぜなら、私の精神が緊張に耐えられないと思うからです。私は精神を病んでいます。肺病はこの精神の病いが岸を越えてあふれたものにすぎません。私がこの病気にかかっているのは、四、五年前の最初の二つの婚約のときからです。(Mi 29)

「最初の二つの婚約」とは、フェリーツェ・バウアーとの婚約のことである。カフカはフェリーツェと二度婚約し、二度ともそれを破棄した。そのことを引き合いに出しながら、「精神を病んで」おり、「緊張に耐えられない」とミレナの誘いを断っている。また他の理由として、婚約者ユーリエとカールスバートで休暇を過ごしてからプラハに帰る予定であることを挙げている。ちょうど彼女から、約束通り6月8日に会えるかどうかの確認を求める電報が届いていたのである。しかし、カフカは夜の11時になって同じ手紙に書き加え、ユーリエにはカールスバートに行けないという電報を打ったと知らせている。ただ、「かといってウィーン経由にしないことは疑いありません。月曜日にミュンヘン経由で、どこへ行くかはわかりません、カールスバート、マリーエンバート、いずれにせよ一人です」(Mi 33)と書く。カフカのうろたえぶりがわかる。

6月2日の手紙では、行くか行かないかについての自問自答が延々とくり返された後、最後に、「もしあなたが二週間後にも、金曜日のようにはっきりと私に来ることを望んでおられるな

ら、私は行きます」(Mi 39)と断言している。ところが12日には、「僕がウィーンに行くかどうかは、今日はまだ言えない。でも行かないと思う」(Mi 55)と述べ、第一の理由として「僕の精神の力を超えている」ことを挙げている。二日後、カフカはウィーンに行った「いやな夢」(Mi 62)を見たことを報告している。出発の5日前の23日になってもまだ、「今日ならたとえば、僕はきっとウィーンに行くと言うだろう。でも今日は今日、明日は明日なので、まだ決めないで置く」(Mi 76)と相変わらず揺れている。翌日には、ウィーンの西駅に到着すると伝えながら、括弧書きで、「でもウィーンの再会である必要はない、手紙においても可能」(Mi 77)と付け加えている。25日には、会う場所を事前に決めておく、「息がつまる」(Mi 80)ので、着いてから連絡すると書く。カフカは6月29日の朝ウィーンに到着するが、ミレナには、30日朝10時にホテルの前で待っていると郵便で知らせている。到着から24時間も経ってからようやく会おうというのである。いかにカフカがミレナと会うことに最後の最後まで不安を感じていたかがわかる。

カフカの「不安」について、ミレナは、1921年1月か2月頃にマックス・ブロートに送った手紙で、次のように書いている。

彼の不安が何なのか、私はそれを核心に至るまで知っています。それは前から、彼が私を知る前からもうずっと存在していました。私は彼の不安を知った上で彼に会ったのです。私はそれを理解することによって、それに対処しました。フランク(フランツ——筆者注)が私の隣にいた四日間、彼はそれを感じていませんでした。私たちはそれを笑い飛ばしました。どんなサナトリウムも彼を癒すことはできないと私は確信しています。彼がこの不安を抱いている限り、マックス、彼はけっして健康になることはないでしょう。どんなに心理的に援助してみてもこの不安を克服することはできないのです。というのも不安が援助を妨げるからです。この不安は私ばかりでなく、恥知らずに生きているすべてのものに関係しています。たとえば肉に対してもそうです。肉はあまりにむき出しで、彼はそれを見るのに耐えられないのです。それを当時の私は脇に置いておくことができました。彼がこの不安を感じたときには、彼は私の目を見つめました。私たちはしばらく待ちました。息が切れでもしたみたい、あるいは足が痛くなりでもしたみたい、です。そしてしばらくすると過ぎ去っていました。努力することなど少しも必要ではなかったのです。すべては単純明快でした。(Mi 370)

「フランクが私の隣にいた四日間」とは、ウィーンでの四日間のことである。ミレナはカフカの不安が何であるか知っていると言い、それがカフカの本質的病いとなっていること、当時自分はそれを脇に除けておくことに成功したと述べている。ミレナはカフカの不安が何であるかははっきりとは語らず、「恥知らずに生きているすべてのものに関係して」と漠然とした表現を使っているが、すぐ続いて出てくる「肉」という言葉がそれが何であることを示唆している。カフカの不安とは、端的に言って性行為への不安なのである。

1920年8月9日に書かれたカフカのミレナ宛の手紙は、このことをもっと明瞭に告げている。

しかしまさにこの昼の世界と、君があるとき軽蔑的に男どもの事柄として手紙に書いてき

たあの「ベッドの中の三十分」との間には、僕にとって越えることのできない深淵がある。越えられないのは、たぶん僕がそれを望まないからだろう。向こう側には夜の事柄が、まったくもってあらゆる意味で夜の事柄。こちら側には世界があり、僕はそれを所有している。それなのに、もう一度世界を所有するために、夜に向かって跳ばなければならないという。何かをもう一度所有することができるのか。それはそれを失うことではないのか。ここに世界があり、それを僕は所有している。それなのに向こうに跳ばねばならない。不気味な魔術のために、ちちんぷいぷい、賢者の石、錬金術、魔法の指輪のために。そんなものはいらない。僕はそれがとても恐ろしい。(Mi 202)

「ベッドの中の三十分」とは性行為のことである。ミレナはカフカの不安を和らげるために、それを軽蔑的に「男どもの事柄 (Männer-Sache)」と手紙で述べたと思われる。それに応えてカフカは、昼の世界と夜の世界との間には「僕にとって越えることのできない深淵がある」と打ち明け、続けて、自分たちはもうすでに一つなのに、この上なぜ性行為が必要なのかと、自問の形でミレナに問いかけている。性行為を、「不気味な魔術」、「ちちんぷいぷい、賢者の石、錬金術、魔法の指輪」と言い換え、「そんなものはいらない」と言い、「それがとても恐ろしい」と告白している¹⁶⁾。

2. ウィーンの森で何があったか

以上のようなカフカの不安を念頭において、ウィーンでカフカとミレナの間に起こったことを見ていこう。

カフカは、プラハに戻ってしばらく経った7月15日に、ミレナに宛てて、ウィーンでの四日間について、「最初の日は不確かな日、二日目はあまりにも確かになった日、三日目は後悔の日、四日目はよい日だった」(Mi 117)と述べている。「あまりにも確かになった日」と呼ばれているのは、二人でウィーンの森を歩いた7月1日のことである。ビンダーは、「この日、ミレナと過ごした日々のクライマックスとカフカがみなし、それゆえ後に手紙で何度も言及するあることが起こった」¹⁷⁾と述べている。二人の間に何があったのか。

ビンダーは、ウィーンの森のどこかでカフカとミレナが足を止め、抱き合ったに違いないと推測している。上掲のプロート宛のミレナの手紙の一節を再度引く。

彼がこの不安を感じたときには、彼は私の目を見つめました。私たちはしばらく待ちました。息が切れでもしたみたいに、あるいは足が痛くなりでもしたみたいにです。そしてしばらくすると過ぎ去ってしまいました。努力することなど少しも必要ではなかったのです。すべては単純明快でした。

「息が切れでもしたみたいに、あるいは足が痛くなりでもしたみたいに」という言い方から明らかになるのは、二人が立ったままだったことである。二人は立ったまま抱き合うなどの身体的接触に至り、そのためにカフカは激しい不安の発作に襲われた。しかしミレナの目を見つめることでカフカの不安は静まったのである¹⁸⁾。カフカの不安が肉体的な症状として現れるほど激しいものであったことがわかる¹⁹⁾。ビンダーは「不安状態 (Angstzustände)」、「不安攻撃 (Angstattacken)」²⁰⁾ という表現を使っているが、まさに的確な言葉であろう。ミレナは

このようなカフカの不安を事前に理解しており、それが発現したときに適切に対処したのである。「肉」という言葉で示唆されていた生身の肉体へのカフカの嫌悪感を感じさせないようにしたのである²¹⁾。

不安の発作が治まった後、二人は草地で横になった。同じ8月9日の手紙が、何があったかをほのめかしている。

僕は君を愛しているので(……)、世界全体を愛しており、そして世界には君の左肩もあるので、いや、それは最初は右肩だったから、そこにキスをする、そうしなくなったときに(そして君は親切にも、ブラウスを引き下げてくれた)、そして世界には左肩もあり、森の中での僕の上にある君の顔と、森の中での僕の下にある君の顔もあり、そしてほとんどむき出しになった君の胸での安らいもある。そしてそれゆえ、僕たちがもう一つだったと君が言うとき、それは正しい。ぼくは一つであることにまったく不安を抱いていない。それは僕の唯一の幸福であり、僕の唯一の誇りだ。僕は森でのことだけを言っているわけではまったくない。(Mi 202)

この一節はミレナへの手紙全体の中でも、もっとも美しい箇所であるように思われる。ミレナに直截に自分の思いを伝えており、読者にもカフカの幸福感が伝わってくる。二人はウィーンの森で横になり、抱き合った。互いに上になり、下になる。カフカがミレナの肩にキスすると、彼女はブラウスを引き下げてくれる。そして「ほとんどむき出しになった」ミレナの胸でカフカは安らった²²⁾。二人が「一つ」であったことが確認され、そしてそれがカフカにとって「唯一の幸福」であり、「唯一の誇り」であると言われている。「僕は森でのことだけを言っているわけではまったくない」とあるのは、二人の愛が森での出来事に凝集されているにしても、そのことだけが重要なのではないと強調するためである。

二人の間に抱き合う以上のことが起こらなかったことは、「僕たちがもう一つだった(schoneins)と君が言うとき、それは正しい」という言葉から明らかである²³⁾。肉体的な意味での一体化が実際に生じたのであれば、わざわざこのような言い方をする必要はないからである。ミレナはカフカの不安を慮って、ウィーンの森での肉体的な触れあいを「もう一つだった」と言い、カフカはその言葉をとらえて強く同意したのである。

3. ミレナの変化

ウィーンでの四日間がカフカとミレナにとって幸福なものであったにもかかわらず、その後、二人の間にはしだいに溝が生じてくる。その主な原因はミレナの側にあったと思われる。カフカはミレナがブラハにやってくるのを心から願っていた。しかしミレナの方は、カフカほどの強い気持ちを持ち続けることができなかった。ミレナは後にプロート宛の手紙で、なぜカフカの腕の中に飛び込まなかったかについて次のように述べている。

当時私が彼と一緒にブラハに行っていたら、私は彼の思い描く女性のままだったでしょう。しかし私の両足はここ(ウィーン——筆者注)の大地に限りなく深く根を下ろしていましたし、夫を見捨てることもできませんでした。ひょっとしたら私があまりにも女でありすぎたために、生涯にわたるきわめて厳しい禁欲を意味するだろうとわかっている生活を受

け入れる力がなかったのかもしれませんが。しかし私の中には一つの抑えがたい憧れがあります。私が今送っており、おそらくこれからも送るであろう生活とはまったく別の、一人の子供との生活、大地に根ざした生活への狂おしいほどの憧れがあります。おそらくそれが私の中で、他のすべてのものに、愛に、愛へと飛び立つことに、賛嘆に、そしてもう一度くり返しますが、愛に、勝利を取めたのです。(Mi 371)

ミレナはカフカのもとに行かなかった理由として、ウィーンでの生活に根を下ろしていたこと、夫を見捨てられなかったこと、いつか自分の子供と大地に根ざした生活を送ることへの憧れを持っていたことと並んで、自分が「あまりにも女でありすぎた (zu sehr Weib) ために、生涯にわたるきわめて厳しい禁欲を意味するだろうとわかっている生活を受け入れる力がなかった」ことを挙げている。他の理由づけとは異なり、それほど親しいわけではない相手には通常控えるような表現である。その意味でミレナは正直に語っていると言える。

同じ手紙の後の方で、ミレナは再度このことに言及している。

当時の私は、世の中のすべての女たちと同じごく普通の女でした。小さな、本能的な雌だったのです。そして彼の不安はそこから生じていました。彼の不安は正しかったのです。(Mi 372)

ミレナは自分が「小さな、本能的な雌 (ein kleines, triebhaftes Weibchen) だった」と強く卑下しているが、当時まだ 24 歳になるかならぬかの若さであったことを考えると²⁴⁾、カフカとの生活に躊躇するところがあったとしても何ら不思議ではない。

4. グミュントで何があったか

ウィーンの森での触れあいを語ったカフカの幸福感に満ちた手紙は、一ヶ月以上経った 8 月 9 日に書かれたものであり、これはグミュントでの 8 月 15 日の再会の直前のことである。つまりカフカは、グミュント以前には、ミレナの気持ちに変化が生じていることに気づかず、二人がウィーンの森で確認し合った気持ちのままに思いついていたのである。それゆえグミュントで会った後には、次のように述べることになる。

グミュントへは、それと知らずに、本当に僕は愚かだったんだけど、尊大な確信を持って、まるで僕には何かが起こりうることなんてもう決まっていたかのように、一家を構える主人でもあるかのようにして行ったんだ。(8 月 28 日, Mi 235)

また、ミレナとの関係がほとんど終わった 11 月には、

それら (手紙——筆者注) は何の役にも立たず、ただグミュントの一日をもたらしただけだ。誤解を、恥辱を、ほとんど消えることのない恥辱をもたらしたただけだ。(Mi 299)

と書いている。二人の亀裂はグミュントで決定的になったのである。そこでいったい何があったのだろうか。

カフカとミレナがグミュントで一緒にいたのは8月15日の昼、およそ11時間ほどのことである。ビンダーは、当日はグミュントで雨が降っていたこともあり、二人がホテルで過ごしたことは「ありうる (wahrscheinlich)」²⁵⁾ ことであると述べている。

口頭で伝えられたことに信頼がおけるとすれば、彼女 (ミレナ——筆者注) とカフカは肉体的接触に至ったに違いない。それはウィーンの森で7月3日²⁶⁾ に起こった以上のことだったが、愛する者同士の一体化には至らなかった。なぜなら、カフカが「萎縮した」からである。²⁷⁾

「口頭で伝えられたこと」とは、後にミレナが彼女の最後の恋人エヴジェン・クリンゲルに語り、クリンゲルが彼の友人に語り、その友人が調査にやってきたビンダーに語ったことを指している。そのときに使われた言葉が、「萎縮した (kollabiert)」なのである。

グミュント以後に書かれたカフカの手紙もビンダーのこの推測を裏づけている。グミュントから戻って最初に書かれた8月17日から18日にかけての手紙の冒頭部分は、次のようになっている。

ちょうど今、僕は君にいくつか言えないことや書けないことを言わねばならないような気がしている。僕がグミュントでうまくできなかったことを少しでもよくするためではなく、つまり溺れた何かを救うためではなく、君に僕がどうなのかを少しでも深くわかってもらうためにだ。なんととっても人間同士では結局どうしてもよくありがちなんだけど、君が僕に尻込みしてしまうことのないようにだ。僕はときおり、自分が鉛の重りを持っていて、一瞬のうちに深い深い海の底に引き下ろされてしまうような気がするんだ。僕をつかもうとしたり、なんとか「救って」やろうとしても、結局、弱さからではなく、希望が持てないからでもなく、ただ腹が立つからそのままにしておくことになる。(Mi 217)

グミュント以前の8月9日に「君の胸での安らい」を語ったときの手紙と比べると、極端に沈んだ調子で書かれていることに気づく。「うまくできなかった (schlecht gemacht) こと」という漠然とした表現で、グミュントでの「萎縮」のことに触れ、「自分が鉛の重りを持っていて、一瞬のうちに深い深い海の底に引き下ろされてしまうような気がするんだ」と弁解しているように見える。

続く8月19～23日にかけての手紙では、もっとはっきりしている。

たとえば僕は思い出すんだが、君は僕にプラハで浮気しなかったかと尋ねた。半ば冗談で、半ばまじめに、半ばどうでもよさそうに——また半分が三つ、それがまさにありえないことだったからだ。君は僕の手紙を受け取っているのにそう尋ねた。そんな質問はありえただろうか。(Mi 224)

ミレナはグミュントでカフカに、プラハで浮気した (untreu gewesen) のではないかと尋ねた。これはおそらくカフカの性的機能不全に関連して言われた言葉であろう。カフカは「また半分が三つ」と冗談めかして軽い調子をよそおいながらも、はっきりと、そのような質問は「あ

りえないことだった」とミレナを非難している。「僕の手紙を受け取っているのに」というのは、自分の気持ちをはっきりと知っており、そんなことをするはずがないとわかっているのに、という意味だろう。カフカが 11 月に書いたように、実際、手紙は「何の役にも立たず」、「恥辱をもたらしただけ」だったのである。

5. 二人はなぜうまくいかなかったか

カフカとミレナがうまくいかなかった最大の原因はどこにあるのだろうか。それは性的な事柄に対する考え方の根本的な違いであったと思われる。ミレナの場合は性行為に対して特別の抵抗感があるわけではないので、問題はカフカの側にあったと言えるだろう。かつてフェリーツェとの関係において存在したのと同じ構図がここでも見られる。カフカはフェリーツェに対して性行為のない結婚への願望をもらしていたが、ミレナに対しても性行為のない愛を求めている。それはカフカが性行為に対して激しい嫌悪感を抱いているからである。

グミュントでの逢瀬の直前、8月8日から9日にかけての手紙でカフカは、ミレナに自分の初体験の思い出を長々とミレナに語った後で、次のように述べている。

僕の体は、しばしば何年も静かかと思うと、またもや、あるちょっとした、いやまったくはっきりと忌まわしいことへの、ほんのちょっと嫌なこと、きまり悪いこと、汚れたことへの憧れによって、耐えがたいほど揺すぶられる。(Mi 198)

性的なことは、「忌まわしいこと」、「嫌なこと、きまり悪いこと、汚れたこと」と呼ばれる。それらへの「憧れ」とは性的欲望のことである。続いてカフカは述べる。

僕の人生で初めて、一人ではない、そんな時期が今訪れている。それゆえ君の体が近くにあるということだけでなく、君の存在自体が僕の心を落ち着かせ、また動揺させる。それゆえ僕は汚れへの憧れを抱いていない。(下線原著, Mi 198f.)

今、ミレナがいることでカフカは「一人」ではなく、性的欲望を持たないと言う。

僕は汚れをまったく見ない。外から刺激してくるようなものは何も存在せず、内から生命をもたらすものしかない。つまり墮罪以前の楽園で吸われていた空気がいくらか存在しているんだ。この空気が少しでもあるので「憧れ」がなく、この空気だけでないので「不安」があるんだ。(Mi 199)

ミレナとの結びつきには、「墮罪以前の楽園で吸われていた空気」があると言われる。「墮罪以前の楽園」とは、「汚れ」のない世界、つまりアダムとイヴが性を意識せずに暮らしていた世界のことである。この空気があるために性的欲望は生じないが、それでも性的な事柄は完全に排除できるというわけではないので「不安」も存在すると言われる。このような手紙を受け取ったミレナは、カフカが何を望んでいるかをはっきりと理解したことだろう。カフカとの間で可能なのは、せいぜいのところ、ウィーンの森であったような穏やかな肉体的接触までなのである²⁸⁾。しかしながら、そのような関係は若いミレナにとって、「生涯にわたるきわめて

厳しい禁欲」以外の何ものでもないのである。

カフカは9月14日の手紙で、これまでの二人の関わりを寓話的に総括している。

(……) 森の獣である僕は、当時ほとんど森の中におらず、どこか汚い穴(汚いのは僕がいるせいだ、もちろん)の中に横たわっていた。そのとき僕は野外にいる君を見た。僕がこれまで見たうちでもっとも素晴らしい存在。僕はすべてを忘れた。完全に我を忘れた。立ち上がり、近づいた。この新しい、しかし故郷のような自由にあっても不安だったが、もっと近寄り君のところまで行った。君はとてもやさしく、僕は君のそばに身をかがめた。まるでそれが許されているかのように。僕は顔を君の手に横たえた。僕はとても幸福で、とても誇らしく、とても自由で、とても力にあふれ、我が家にいるようで、そしていつもいつも我が家にいるような気持ちがあった。——でも結局は、僕は獣にすぎなかったのだ。森だけに属し、この野外ではただ君の恩寵によってのみ生きており、それと知らずに(僕がすべてを忘れてしまっていたから)僕の運命を君の目から読みとった。それが続くことはありえなかった。君がとてつもなくやさしい手で僕をなでてくれたとしても、森を示唆する奇妙さを認識せざるを得なかった。森という根源、この本当の故郷を示唆する奇妙さを。来るべきものが来た。「不安」についての話し合いがくり返されねばならなかった。それは僕を(そして君を、君のせいではないのに)苦しめ、むき出しの神経に触れた。何という不潔な苦しみが僕の中でますます大きくなったことだろう。僕は君にとっていつも邪魔をする障害物だった。マックスのことでの誤解がそれに加わった。グミュントではもうはっきりしていた。それからヤルミラ²⁹⁾を理解しているか誤解しているかという話になり、ついにはヴラスト³⁰⁾のところでの愚かで粗雑でどうでもいいことや多くのこまごましたことが間に入った。僕は自分が誰なのかを思い出した。君の目の中に偽りの姿を見ることはもうなかった。僕は夢の恐怖(自分が属していないどこかで、まるでわが家にいるかのように自分を演じているという)を、この恐怖を実際に持っていたのだ。僕は闇に退かざるを得なかった。僕には太陽が耐えられなかった。僕は絶望し、まさに道に迷った獣のように、できる限りの力で走り始めた。「彼女を連れて行けたら」と思い、また反対に「彼女のいる暗闇など存在するのか」と考え続けながら。

君は僕がどのように生きているのかを訊いてきた。こんなふうに僕は生きている。(Mi 262f.)

この一節の基調となっているのは深い諦めである。カフカは、世界から疎外され深い孤独の中で生きざるを得ない自身を「森の獣」になぞらえている。故郷、幸福、自由を感じさせるミレナの側に近寄っていくが、「森を示唆する奇妙さ」、つまり孤独の闇で生きざるを得ない存在の異質性に気づかれ、距離が生まれる。カフカは「自分が誰なのかを思い出し」、自分本来の居場所である森の闇の中に退く。以前はミレナの目を見つめることでカフカの不安は鎮められたが、もはや彼女の目もその魔力を失う。彼女の目の中に見えたものが「偽りの姿」でしかなかったことが明らかになり、今やそこに映るのは「森の獣」でしかない自分の本当の姿である。「森の獣」は「夢の恐怖(Traum-Schrecken)」を覚える存在である。しばしば楽しい夢を見ている最中にふとこれは本当の世界ではないと感じておののくことがあるものであるが、カフカは現実の世界のただ中で、「自分が属していないどこかで、まるでわが家にいるかのように自

分を演じている」と感じるのである³¹⁾。

この手紙には、諦めに満ちていながらもまだ希望を完全に捨てていないと見えるところもある。引用の終わり近くで、自分を闇に、ミレナを太陽に擬し、互いの絶対的な相容れなさを強調しながらも、「彼女を連れて行けたら」と書いているし、「こんなふうに僕は生きている」という一文には、一縷の望みに託すカフカのミレナへの強い訴えが感じられるからである。

むすび

「森の獣」について述べた手紙と同じ 9 月 14 日に書かれたカフカの別の手紙には、次のような有名な一文がある。

愛とは、君が僕にとってわが身をえぐるナイフだということだ。(Mi 263)

まさにこれこそ、カフカのミレナとの関係を端的に表現する一文である。カフカはミレナを愛する。しかし愛すれば愛するほど、性の問題は避けて通ることのできないものとなる。それは「わが身をえぐるナイフ」と表現されるほどに肉体感覚的な苦痛を伴う事柄だったのである。

性行為に対するこれほど激しいカフカの抵抗感が何に由来するのか、——それについて述べるには稿を改めねばならない。

注

- 1) Binder, Hartmut: *Kafkas Wien*, Prag: Vitalis 2013. (=Binder)
- 2) *Franz Kafka. Eine Chronik*, zusammengestellt von Roger Hermes, Waltraud John, Hans-Gerd Koch und Anita Widera, Berlin: Wagenbach 1999 (=Chronik). Pawel, Ernst: *Das Leben Franz Kafkas. Eine Biographie*, aus dem Amerikanischen von Michael Müller, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt 1990 (=Pawel). Alt, Peter-André: *Franz Kafka, Der ewige Sohn, eine Biographie*, München: C. H. Beck 2005 (=Alt).
- 3) カフカがミレナに初めて会った時期であるが, *Kafka, Franz: Briefe an Milena*, hrsg. v. Jürgen Born u. Michael Müller, Frankfurt a. M.: Fischer 2011 (=Mi, 初版は 1983) の年譜では 1919 年 10 月となっている。(Mi 402) *Chronik* では 1920 年 2 月か 3 月頃となっており, Alt もまた「カフカがメラーンに発つ一ヶ月前」(Alt 537), つまり 1920 年 3 月初め頃としている。Binder は 1920 年 2 月頃と見ている。(Binder 335)
- 4) Binder 339.
- 5) *Chronik*, Alt, Binder は, カフカがウィーンに出発した日を 6 月 28 日としている。(Alt 542, Binder 345) Pawel は出発日を明記していないが, ウィーンに着いたのは 6 月 27 日であるとしている。(Pawel 450)
- 6) Binder 348f. *Chronik* は最初に会った日を明示していない。Pawel は 6 月 30 日であると考えており, Alt ははっきり 30 日としている。(Pawel 451, Alt 542)
- 7) ウィーンの森を訪れたのがいつか, また複数回かについては研究者によって見解が大きく異なっている。Pawel には特に記述はない。*Chronik* は, カフカのウィーン滞在中に二人は「ウィーン郊外への遠出を何度か (Ausflüge)」試み, 7 月 3 日には「ウィーンの森への遠出 (Ausflug)」をしたとしている。Alt は, 6 月 30 日に「町の郊外への長時間にわたる散策 (Wanderung)」をし, 7 月 3 日には「ウィーンの森への遠出 (Ausflug)」をしたとする。(Alt 542) それに対して Binder

- は、二人がウィーンの森を訪れたのは7月1日の一度だけであるとしている。(Binder 356)
- 8) Brod, Max: *Über Franz Kafka*, Frankfurt a. M.: Fischer 1980, S. 195.
- 9) Binder 392ff. カフカとミレナが土曜日に到着して一緒に夜を過ごしたという Chronik や Alt や Stach (Stach, Reiner: *Kafka. Die Jahre der Erkenntnis*, Frankfurt a. M.: Fischer 2011, S. 396f.) の記述を Binder は、「伝説の領域に属する」(Binder 394) として斥けている。
- 10) Chronik 172.
- 11) 1921年1月末、カフカはプロートに宛てて、三週間前にミレナにそう伝えたことを知らせている。(Kafka, Franz: *Briefe 1902-1924*, hrsg. v. Max Brod, Frankfurt a. M.: Fischer 1975, S. 295) ミレナも1月初め頃のプロート宛の手紙で、カフカからそのように書かれた手紙を受け取ったと述べている。(Mi 367) カフカのミレナへの手紙自体は失われている。
- 12) たとえば Pawel は、4月27日と5月8日のミレナの訪問について、「おそらく二人が会ったのはこれが最後だったろう」(Pawel 459) としている。なお、Chronik と Alt にはいつが最後だったかの記述はない。Mi に添えられた年表では、1923年6月が最後となっている。
- 13) ユダヤ人のジャーナリストで既婚者。当時パートナーのいたミレナにとって心の恋人のような存在であった。Wagnerová, Alena: *Milena Jesenská. Biographie*, Frankfurt a. M.: Fischer 2006, S. 155ff 参照。
- 14) Binder 422. また、Wagnerová, a. a. O., S. 99 u. S. 158 参照。
- 15) Binder は、「そのことを疑う理由はほとんどない」(Binder 423) と述べている。
- 16) フェリーツェ・パウアーとの結婚を考えていた1913年にも、カフカは性行為に対する自分の不安を彼女に思い切って打ち明けている。「まったく率直に言えば(……), そして君に結局狂人と見なされるのを承知で言えば、それ(自分の不安——筆者注)は、結びつくことに対する不安(Angst vor der Verbindung)なんだ。もっとも愛する人とさえ、いや、まさにもっとも愛する人だからこそなんだ。」(1913年7月10日付のフェリーツェ宛の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1913-März 1914*, hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M.: Fischer 1999, S. 236) 「結びつくこと」が性的な意味で言われていることは、前後関係から明らかである。
- 17) Binder 367.
- 18) グミュントでの再会を前にしたとき、カフカは何度もミレナの目を見ることに言及している。ミレナとの間に起こるかもしれないことを予感し、その不安を払拭しようとしているかのようなのである。「ともあれ、日曜日には僕たちは一緒だ。五、六時間、語り合うには短すぎるが、黙って、手を握り、目を見つめ合う(In-die-Augen-sehn)には十分。」(8月8日, Mi 194) 「僕の目を見つめて！(Sieh mir in die Augen!）」(8月9日, Mi 203) 「君の手を握り、君の目を見つめていたい。」(8月10日, Mi 208)
- 19) 「父への手紙」に次のような個所がある。「ではぼくはなぜ結婚しなかったのでしょうか。(……) 本質的な障害は、(……) 僕にはどうも結婚する精神的能力がないらしいということだったのです。このことは次のことからわかります。つまり、結婚すると決めた瞬間から、僕はもはや眠れなくなり、昼も夜も頭がカッとし、もはや生きているとは言えず、絶望してふらふらうろつくばかりになるのです。」(Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, hrsg. v. Jost Schillemeit, Frankfurt a. M.: Fischer 1992, S. 208)
- 20) Binder 367.
- 21) ミレナが絶えずカフカの不安を和らげようとしていたことは、カフカの次の手紙でもわかる。「君の手紙のうちでもっともすてきな手紙は(……), 君が僕の「不安」を正当だとし、同時に僕が不安をいさぐ必要はないと説明しようとしている手紙だ。」(8月9日, Mi 201)
- 22) これまで上記引用のことが起こったのは、7月3日、ウィーンの森においてであるとされてきたが、Binder はそれは誤りであると言う。引用前半の肩へのキスは、7月3日の晩、カフカのホテルの部屋で別れぎわに立って行われた抱擁のさいのものであり、後半のウィーンの森での転がりながらの抱擁は、7月1日のことであると主張している。(Binder 381ff.) 本稿では両方ともウィーンの森でのことであると見なす。

- 23) Pawel 451, Alt 543, Binder 368 も参照のこと。
- 24) 1986年生まれのミレナは、1920年8月10日に24歳となった。
- 25) Binder 394.
- 26) Binder は、カフカとミレナがウィーンの森に行ったのは7月3日ではなく、7月1日であると強調している（注7参照）ので、ここは誤記であろう。
- 27) Binder 394.
- 28) Binder は、「彼（カフカ——筆者注）は、言葉の普通の意味での性的共同性（Geschlechts-gemeinschaft）を排除したミレナとの生活がありうると信じていた」と述べている。（Binder 370）Alt は、カフカが「高められた形の共同性（gesteigerte Form einer Gemeinsamkeit）」（Alt 543）だけを望んでいたと言う。Stach は、次のように述べている。「というのもセックスは彼（カフカ——筆者注）には遠回り、迷い道と思われるからである。それは、悪に通じていないにしても、闇には通じている。その闇の中で男と女は嵐に身を委ね、結局、自分たちがすでに所有していると思っていたものを手からもぎ取られることになる。幸福というものをカフカは、平安や安らぎや完全なリラックスのイメージでしか思い描けない。（……）頭を彼女の胸や膝にのせ、ひんやりとした手を額に感じるというイメージでしか。」（Stach, a. a. O., S. 382）ここで思い出すのは、ミレナが後になって自分を「小さな、本能的な雌だった」と卑下し、カフカを世界中で「ただ一人純粹な人間」（Mi 372）であると賞賛する手紙をプロットに送ったことである。しかしカフカを聖人君子であったと思いきや違ひしてはならない。性行為に至らない共同性へのカフカの強い願望の背後にあるのは、性行為への激しい不安・恐れなのである。
- 29) ヤルミラはギムナジウム時代からのミレナの友人で、プラハに住んでいた。
- 30) ヴラストはミレナの父親イエセンスキー教授の診療所の助手。
- 31) ゲルハルト・クルツは「夢の恐怖」を、「＜自分が属していないどこかで、まるでわが家にいるかのように自分を演じている＞と突然発見すること」であると解している。（Kurz, Gerhard: *Traum-Schrecken, Kafkas literarische Existenzanalyse*, Stuttgart: Metzler 1980, S. VI）

Kafkas Beziehung zu Milena

— Was im Wienerwald und in Gmünd geschah —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Anknüpfend an Hartmut Binders 2013 veröffentlichtes Buch *Kafkas Wien* soll hier auf die Liebesbeziehung des Dichters mit Milena Jesenská-Pollak Licht geworfen werden; das Hauptaugenmerk gilt deren Scheitern.

Nachdem Kafka Frau Jesenská-Pollak im Prager *Café Arco* kennenlernte und ihr die Erlaubnis gab, einige seiner Erzählungen ins Tschechische zu übersetzen, meldet er sich im April 1920 brieflich aus Meran, wo er sich zur Kur aufhält. Es folgt ein Briefwechsel, und obgleich nur Kafkas Schreiben erhaltengeblieben sind, wird doch klar, dass sich die beiden verliebt haben. Nach der Kur trifft sich das Paar in Wien und verbringt vier glückliche Tage zusammen. Kafkas Sexualangst begegnet Milena hierbei mit Geduld und Verständnis. Das ändert sich aber, als sich die beiden anderthalb Monate später in Gmünd wiedersehen. Was für Milena das Normalste von der Welt ist – dass Mann und Frau auch geschlechtlich miteinander verkehren, stößt Kafka ab. Der Bruch ist von daher folgerichtig.

【Key words】 Liebe, Angst, Geschlechtsverkehr, Traum-Schrecken